西部開発事業(畑地帯総合土地改良事業)

—緊急発掘調査報告—

宮の原遺跡

1978

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

——緊急発掘調査報告——

宮の原遺跡

1978

伊那市教育委員会

南信土地改良事務所

序

伊那市の南部地区西春近は、西側に権現山を主とする木曽山脈の連なりが広がり、山麓には北側は小黒川、戸沢川、小戸沢川、犬田切川、猪の沢川、藤沢川、堂沢川等大小数多くの河川によって形成された河岸段丘や扇状地が発達している。このような変化に富んだ地形のためにいたるところに遺跡がみられる。

当西春近地区の西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）は昭和47年度より着手され、毎年、いくつもの遺跡が発掘調査され、記録保存という措置がとられてきました。

昭和52年11月より宮の原地籍の畑地帯総合土地改良事業が開始されることになり、この宮の原遺跡の緊急発掘調査を実施することになった。団長に友野良一先生、調査団に上伊那考古学会の先生方をお願いして調査団を編成し、発掘調査に着手しました。

今度の調査は、遺跡の一部分の発掘にとどまったが、平安時代の住居址１軒、土壙１基、江戸時代の墓壙１、暗渠排水１が検出された。これらの成果は、西春近の古代、中世・近世の時代的な流動について貴重な成果を上げることが出来ました。

ここに、調査報告書の発刊にあたって南信土地改良事務所をはじめ、長野県教育委員会、調査団の諸先生、作業員の皆様に心より謝意を表する次第であります。

昭和５３年３月３日

伊那市教育委員会

教育長　伊　沢　一　雄

凡　例

1．今回の発掘調査は県営圃場整備に伴なう，土地改良事業で，第５次緊急発掘調査にもとずく報告書とする。

2．この調査は，県営畑地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で，国・県・市の補助金のもとに，事業は長野県南信土地改良事業所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3．本調査は，昭和52年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美，田畑辰雄

◎図版作製者

○遺構及び地形

友野良一，飯塚政美，田畑辰雄

◎写真撮影

○発掘及び遺構

友野良一，飯塚政美，田畑辰雄

○遺物

友野良一，飯塚政美，田畑辰雄

5．本報告書の編集は主として，伊那市教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　環　境 …… (1～3)

第1節　位　置 …… (1)
第2節　地形・地質 …… (2)
第3節　周辺遺跡との関連 …… (2～3)

第Ⅱ章　発掘調査の経過 …… (4～6)

第1節　発掘調査の経緯 …… (4)
第2節　調査の組織 …… (4)
第3節　発掘日誌 …… (5～6)

第Ⅲ章　遺　構 …… (7～12)

第1節　住居址 …… (7)
第2節　墓　壙 …… (7～8)
第3節　土　壙 …… (8～9)
第4節　暗渠排水 …… (9)

第Ⅳ章　遺　物 …… (13)

第Ⅴ章　ま と め …… (14)

挿　図　目　次

第１図　位置及び遺跡分布図 …… （１）
第２図　地形図 …… （３）
第３図　第Ⅰ区遺構配置図 …… （７）
第４図　第Ⅲ区遺構配置図 …… （７）
第５図　第Ⅰ号住居址・第１号墓壙実測図 …… （８）
第６図　第１号住居址カマド実測図 …… （９）
第７図　第２号墓壙実測図 …… (10)
第８図　第１号土壙実測図 …… (10)
第９図　暗渠排水実測図 …… (11～12)
第10図　茶臼実測図 …… (13)

表　　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… （２）

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　遺　　構
図版３　遺　　構
図版４　遺　　構
図版５　遺　　構
図版６　遺物出土状況

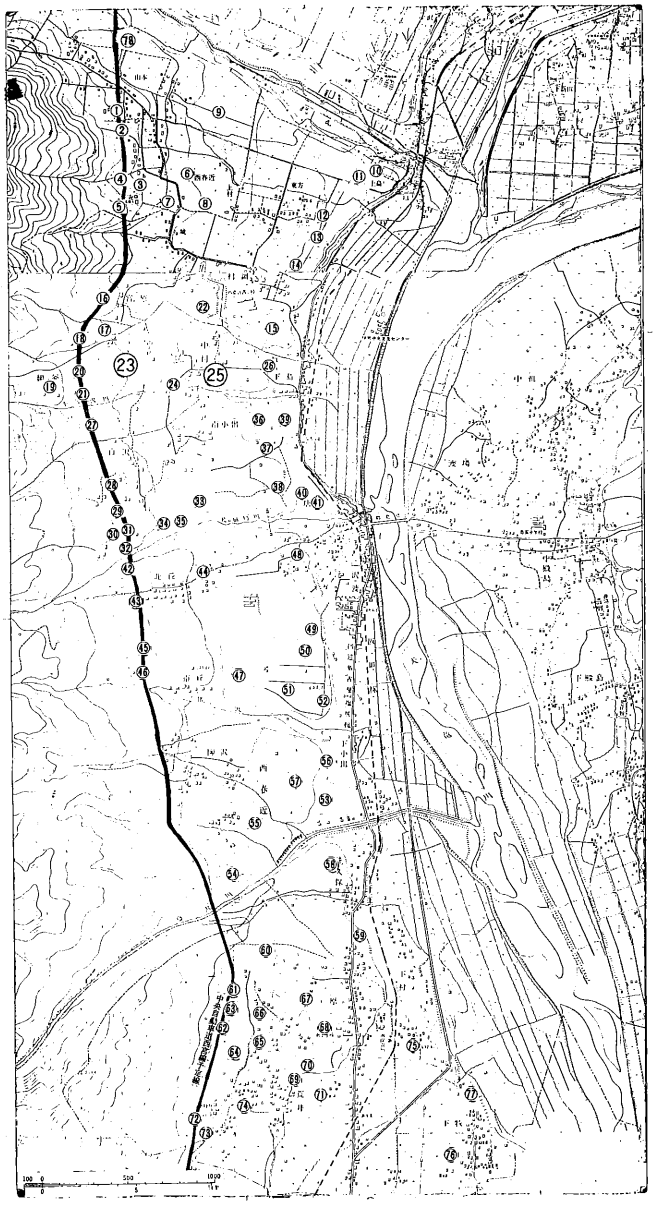
第Ⅰ章　環　　境

第1節　位　　置

宮の原遺跡は，長野県伊那市西春近宮の原部落に所在している。伊那市街より遺跡までに至る道順は次の通りである。飯田線下島駅で降り，北は戸沢川に南は小戸沢川に沿って西方約1㎞程行くと，日蓮宗の深妙寺がある。遺跡は深妙寺をとりまいて存在している。

遺跡の名称

1　城平上
2　城　平
3　常輪寺
4　宮　林
5　山の根
6　山　本
7　常輪寺下
8　上　村
9　北　条
10　上島下
11　上　島
12　東方B
13　東方A
14　村岡北
15　村岡南
16　大　境
17　中　原
18　百駄刈
19　西垣外
20　細ケ谷A
21　細ケ谷B
22　小出城
23　宮ノ原
24　浜射場
25　中　村
26　中村東
27　山寺垣外
28　白沢原
29　名　廻
30　名廻西古墳
31　名廻東古墳
32　名廻南
33　児　塚
34　鎮護塚西古墳
35　鎮護塚東古墳
36　カンバ垣外
37　丸　山
38　南小出南原
39　薬師堂
40　唐木原
41　唐木古墳
42　北丘B
43　北丘A
44　北丘C
45　南丘B
46　南丘A
47　南丘C
48　眼子田原
49　山の神
50　上の塚
51　沢渡南原
52　下小出原
53　天伯原
54　南　村
55　東　田
56　天　伯
57　下小出原
58　井の久保
59　表木原
60　山の下
61　菖浦沢
62　富士山下
63　富士塚
64　広垣外1
65　広垣外2
66　鳥井田
67　高遠道
68　西春近南小学校附近
69　安岡城
70　城の腰
71　横　吹
72　和　手
73　上手南
74　宮入口
75　寺　村
76　下　牧
77　下牧経塚
78　山本田代



第1図　位置及び遺跡分布図

第２節　地形・地質

今までに西春近地区についての地形・地質について述べられているのを参考にして述べることにする。昭和51年度眼子田原遺跡発掘報告書によると『伊那谷に一般的に通ずる地形は西に，中央アルプス，東に南アルプス，その前山である伊那山脈とにはさまれた南北に細長い盆地状地形を呈している。中央の最低部に源を諏訪湖に持つ天竜川が流れ，一般的によばれている縦谷状地形を成している。さらに本流である天竜川の両岸には数多くの小河川があり，それらによって形造された大小の扇状地，河岸段丘，渓谷が展開している。伊那市附近では小沢川，三峰川，小黒川が主たる河川であり，これらは同様に大きな段丘や扇状地を形成した要因となっている。』

本遺跡地は天竜川の支流である小戸沢川の左岸段丘面，また権現山麓より押し出した扇状地，いわば複合扇状地上に展開している。標高は 690m 前後を測定できる。遺跡地の周辺は大部分が水田でところどころに畑がみられ，それは桑畑として利用されている。

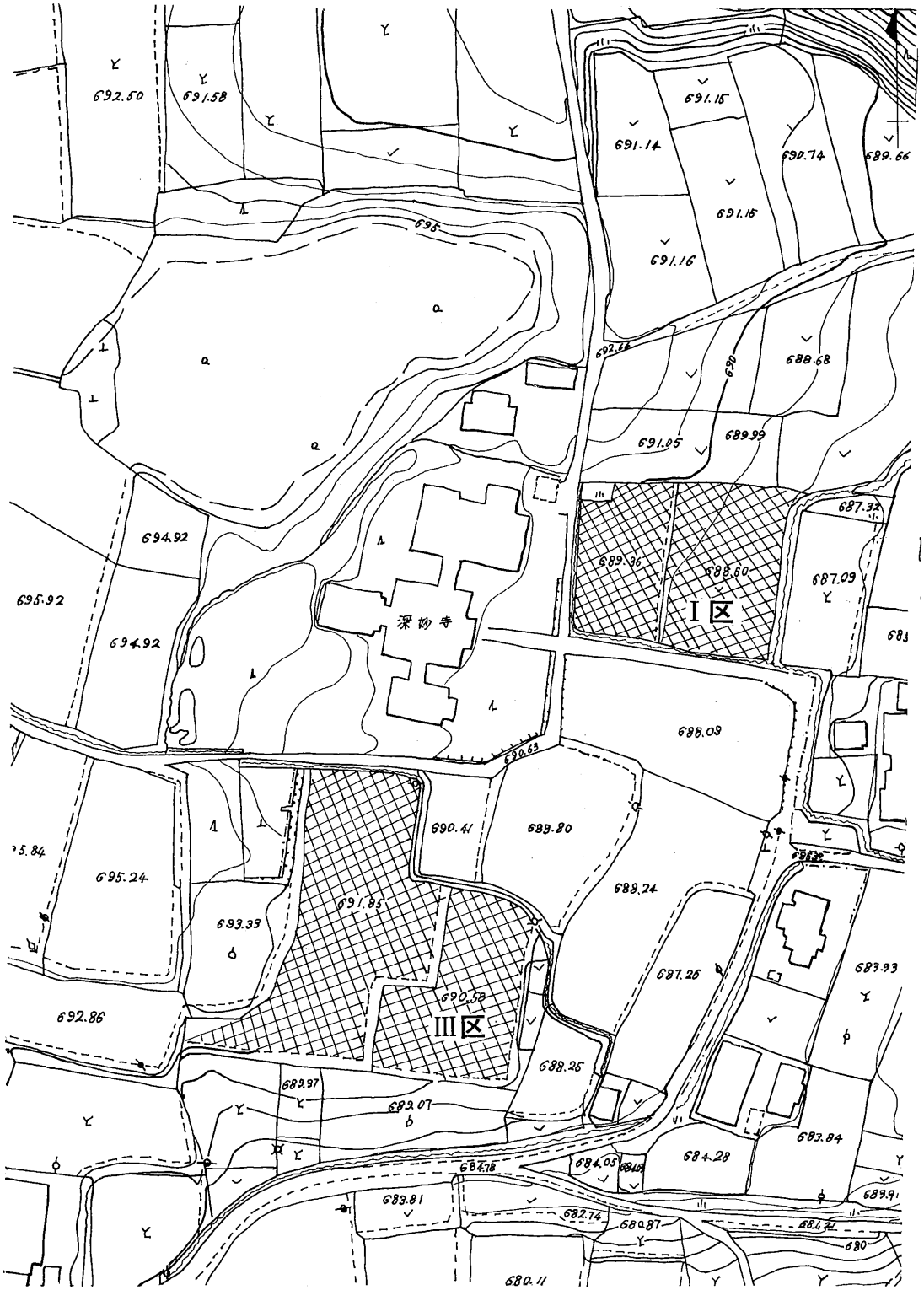
第３節　周辺遺跡との関連

宮の原遺跡は出土遺物より，縄文時代から江戸時代までにわたる遺跡であることが明らかになってきたが，調査区域が限定されていたので，結論づけられるような成果を穫るにはいたらなかったそこで，ある程度，結論づけができるように犬田切川を中心にして分布している遺跡を時代別に表を利用してまとめてみた。

宮の原遺跡を含めた周辺遺跡の内容は，次の通りである。(第１図参照)

NO	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生			奈良・平安			中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
22	小出城	城				○	○	○								○	(2270)
23	宮ノ原	宮の原					○										(2288)
24	浜射場	〃					○										
25	中村	中村					○										(2285)
26	中村東	〃											○				
27	山寺垣外	白沢					○									○青	中央道(8662)
28	白沢原	〃					○						○	○	○		〃 (2274・8660)
29	名廻	〃			○		○						○	○	○		〃 (8672)
30	名廻西古墳	〃															横穴式石室
31	名廻東古墳	〃											○	○			中央道
33	児塚	〃					○						○				
34	鎮護塚西古墳	〃															横穴式石室
35	鎮護塚東古墳	〃															横穴式石室
36	カンパ垣外	南小出					○						○	○	○		
37	丸山	〃					○										
38	南小出南原	〃					○						○	○	○		(2271)
39	薬師堂	下島					○						○	○	○	○青	(2279)
40	唐木原	唐木				○	○						○	○	○		
41	唐木古墳	〃											○	○			横穴式石室

第１図　周辺遺跡一覧表



第2図　地　形　図（1：1500）

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島，東方部落，昭和49年度の東方，村岡，城，山本部落にわたって行なわれてきました。昭和51年度は沢渡の上段の（眼子田原）地区が該当しました。発掘調査地区は水田であったために，一作収穫後に手をつける運びとなった。発掘調査は11月中旬から下旬にかけて行なわれました。発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会ではその件について承諾しましたので，市教育委員会を中心に，宮の原遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を行なうこととした。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第２節　調査の組織

宮の原遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長	
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長	
委員	赤羽映土	伊那市教育委員長	
〃	原　益久	南信土地改良事務所長	
調査事務局	竹松英夫	伊那市教育委員会社会教育課長	
〃	有賀　武	〃	課長補佐
〃	米山博章	〃	係長
〃	三沢真知子	〃	主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚政美	〃
〃	田畑辰雄	〃
〃	福沢幸一	〃
〃	荻原　茂	東京薬科大学学生
〃	丸山弥生	長野県考古学会会員

第３節　発掘日誌

昭和52年11月10日　テントを現場へ運搬する。

昭和52年11月11日　テントを全部で４張に張る。テントのなかで作業員の休憩用のを西側に３張道具用のテントをそれとは直角に北側に張る。

昭和52年11月12日　遺跡の費用，あるいは日程等の理由により，遺跡の集中地区，すなわち中心部をつきとめるために各所にグリット掘りを入れてみる。遺物はわずかに散布していた。それは，土師器，須恵器，灰釉陶器，天目茶碗の破片であった。

昭和52年11月14日　遺物の出土量の多い，現況が畑の地区にブルトーザーを入れておく，さらに現況，水田２枚にブルトーザーを入れる。この地区は小戸沢川左岸段丘の突端部であった。この地区の遺物は内耳土器，中世の古瀬戸，黄瀬戸，天目茶碗等の破片であった。

昭和52年11月15日　グリットを設定する。寺の東側の畑地帯を１区として，南から北にＡ～Ｔ，西から東へ１～９とする。一辺は２ｍ×２ｍの面積は４㎡であった。Ａ１から順々に１つ置きに掘り進めていく，遺物はところどころから出土した。そのおもなものは中世陶磁器片，内耳土器片であった。

昭和52年11月16日　昨日に引き続いて，Ⅰ地区のグリット掘りを進めていくと，Ⅰ区の北側にあたる位置に，東西に走る溝状の落ち込みがみられ，よく精査していくと，若干，蛇行状になっている模様であった。それらの溝のなか，あるいは，その周辺に拳大程から人頭大の石が無数に配列してあった。それらの石の間から内耳土器片，中世陶器片，天目茶碗等の出土がみられた。これを第１号溝状遺構とした。

昭和52年11月17日

本日は新らたに，全面的にわたって掘り下げを進めてみたが，水田造成時に大部分破壊されたとみえて，遺物の出土は全くなかった

昭和52年11月18日

本日は新らたに区を設けて，グリットを入れてみると，黒々とした落ち込みがみられたこの落ち込みの実態を把握するために，周辺の調査を進めていくとそれは，方形状の形に

発　掘　風　景

なり，これを第１号住居址とした。第１号溝状遺構の拡張とその掘り下げ，さらに，そのなかの石の洗い出しをして，写真撮影ができるようにした。

昭和52年11月19日　第１号住居址のプラン確認をつかめるようにした。それによると，隅丸方形状となり，ところどころに焼土の堆積がみられた。焼土の集中地点が東側に近いために，カマドは東壁にあるように思われた。一方，昨日と同様に第１号溝状遺遺構の拡張，掘り下げをする。

昭和52年11月21日　第１号住居址の掘り下げをする。東西に住居址の中央部にベルトを残して，掘り下げを進めていくと，なかより，土師器片，須恵器片，灰釉陶器片の出土がみられ，平安時代と判明した。同住居址を掘り下げていく段階で，北壁近くの床面上に落ち込みがみられ，それらのなかより，キセル，寛永通宝が出土した。これらは江戸時代の墓壙と考え，第１号墓壙とした。特に６枚の寛永通宝は緑青を吹き，それらは，みんな附着していた。第１号住居址の南東に長円形状の落ち込みがみられ，第１号土壙とする。第１号溝状遺構は昨日と同様に掘り下げを進めていき，さらに，東側へと壙張していく。

昭和52年11月22日　多少の雨降りであったがグリット掘りを進めていく。

昭和52年11月23日　遺物の集中地区，あるいは分布状態を，さらに遺構集中地区確認のためにグリットをところどころに入れる。それによると，遺物はあまり出土しなかった。

昭和52年11月24日　第１号住居址のベルトをとるとともに完掘をする。この住居址のなかにある第１号墓壙，さらに，同住居址の南側にある第１号土壙の完掘をする。

昭和52年11月25日　第１号溝状遺構の４本残したベルトの実側，さらに，北側に点在する石の洗い出しをして，さらに，東側や西側へ拡張していく。遺物はなかより多量の中世陶器の出土をみた

昭和52年11月26日　西側へ溝状遺構を拡張していくと，深妙寺のすぐ東側の水田下で，南側へ曲折しており，掘り下げていくと，北側と同様に西側にも拳大程から一抱えする程の石が不規則に配列してあった。遺物は内耳，中世陶器片等の出土がみられた。本日の段階で溝状遺構は暗渠排水となった。

昭和52年11月29日　第１号住居址，第１号墓壙，第１号土壙，暗渠排水の清掃及び写真撮影をする。前述した４カ所の遺構の実測。

（飯塚政美）

第Ⅲ章　遺　　構

本発掘した場所を区にわけた。第Ⅰ区は深妙寺の東側の水田で，暗渠排水，第２号墓壙，第Ⅲ区は寺の南側で，第１号住居址，第１号土壙，第１号墓壙がそれぞれ発見されている。

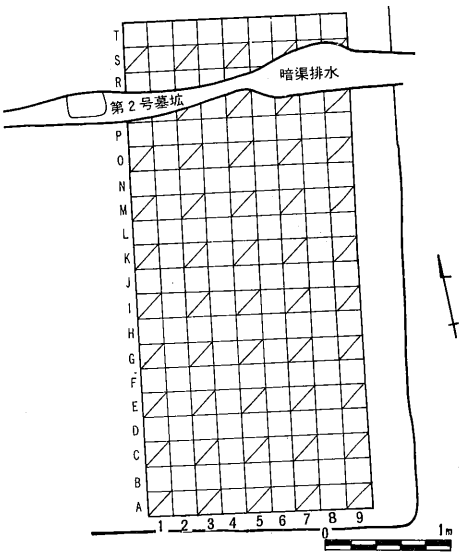
第１節　住　居　址

第１号住居址　（第５～６図，図版２）

第Ⅲ区の水田耕作面より40cm位下ったローム層面を掘り込んで構築された竪穴住居址である。平面プランは隅丸方形で，その規模は南北4m 95cm×東西4m 95cm程を測定できる。壁の状態はかたくて，凹凸は少なくわずかに外傾していた。

柱穴はきちんとしていないが，９カ所にあって，主柱穴が整っていない。床面の状態は中央がかたいが，ほかは軟弱である。カマドは東壁中央部にあって，石組粘土カマドであり，その保存状態は割合に良好であった。

遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器が出土しており，したがって，本址は平安時代の住居址と思われる。



第３図　第Ⅰ区遺構配置図

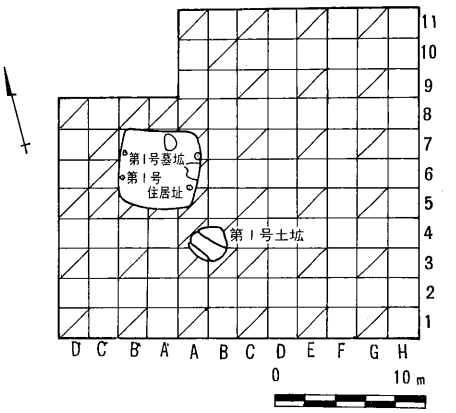
第２節　墓　　壙

第１号墓壙（第５図，図版３）

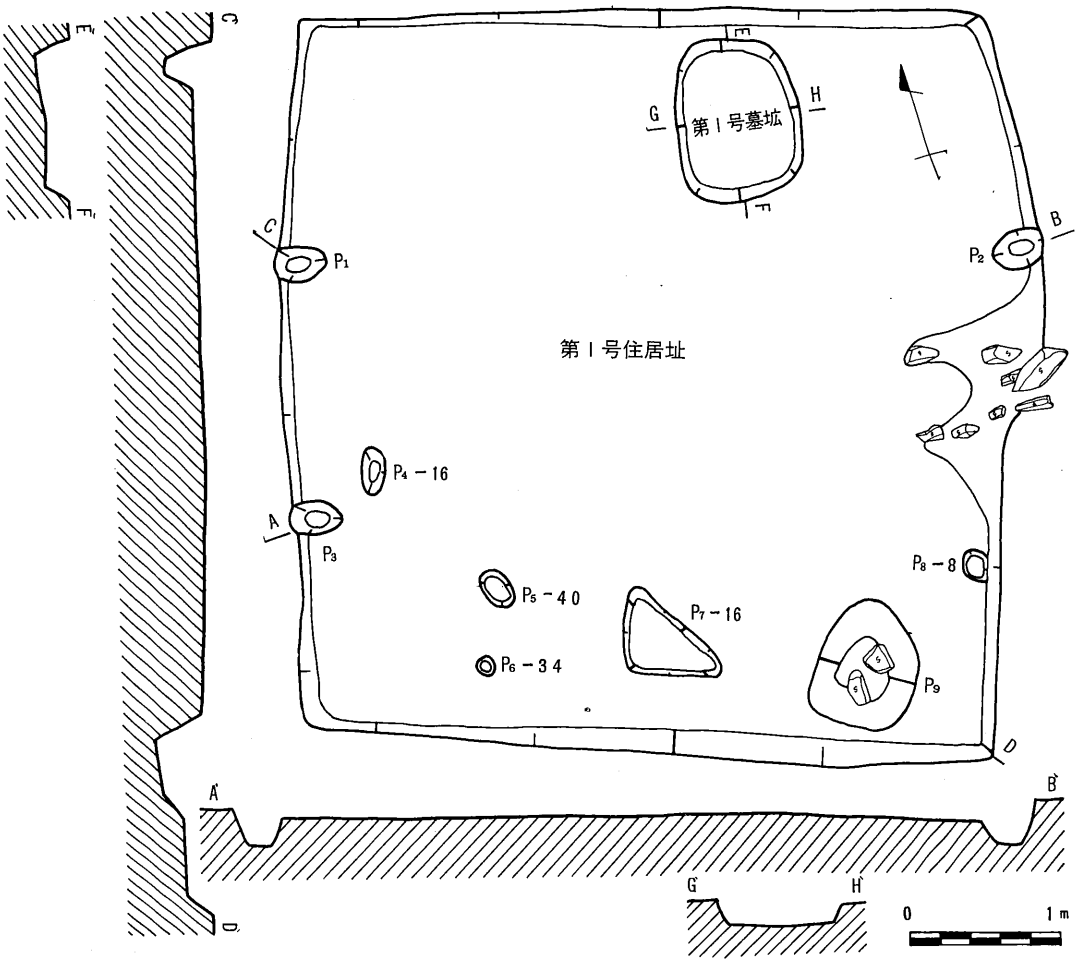
第１号住居址の北壁の近くに発見された墓壙である第１号住居址の床面を掘り込んで構築してあり，その規模は南北１m 10cm，東西85cm程を測定で，平面プランは長円形である。現況の壁高は浅くて，10数cmしかなかったが，構築当時は当然，もっと深かったものと思われる。

床面は大般水平で，かたいタタキになっていた。遺物は床面に密着してキセルと寛永通宝が出土した。寛永通宝は６枚一諸に重なって出てきた。キセルも寛永通宝も青銅分が多いために，青く緑青が吹いていた。

本墓壙は江戸時代のものと思われる。この事実は六文銭の風習を如実に実証できた。



第４図　第Ⅲ区遺構配置図



第５図　第１号住居址・第１号墓壙実測図

第２号墓壙　（第７図，図版５）

本土壙は暗渠排水の石を取り除いた下から発見された墓壙である。砂質混合の黄褐色土層を掘り込んで構築されてあり，その規模は南北１ｍ65cm，東西２ｍ80cm程を測っている。その平面プランは隅丸方形を呈している。壁面は砂質混合の粘土をかたくつき固め，さらに，わずかに傾斜をもたせてある。その高さは北で55cm，南で70cm，西で65cm，東で50cm程をそれぞれ測定できる。

床面は壁と同様に，若干の凹凸はあるが，かたく粘土でつきかためてある。覆土中より少量の骨片と宋銭の出土がみられた。覆土は黒色土の落ち込みが大部分であった。本墓壙は中世時代のものと推定できると思われる。

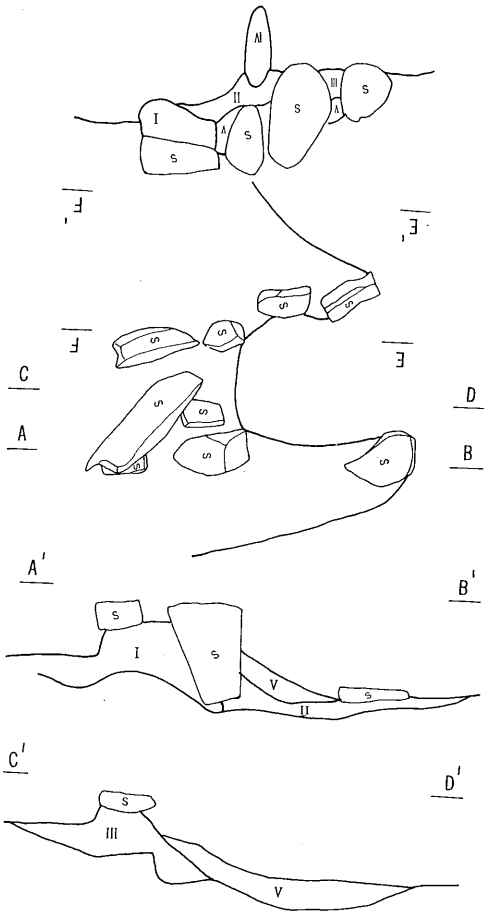
第３節　土　　壙

第１号土壙（第８図，図版２）

本土壙は第１号住居址の南東の位置に検出され，ローム層を掘り込んで構築され，平面プランは円形状を呈している。土壙は中央部の高いところを境界にして南側と北側にそれぞれ凹み状になっていた。南側の規模は南北１ｍ10cm，東西２ｍ40cmであって，壁高は南側60cm，北側70cm，西側55cm，東側45cmをそれぞれ計ることができる。状態としては東側は内弯が強く，他の壁面は外傾が強かった。壁面全ては軟弱気味であった。

床面はわずかに起伏がみられ，軟弱であった。北側のは東西１ｍ70cm，南北50cm程の規模を有し，北壁は急斜面を，南側を垂直を成していた。壁面の状態は軟弱であった。

床面は一点に集中するような断面であったためにはっきりとしなかった。遺物は双方の穴から全く出土しなかった。



I　黒色土
II　黒褐色土
III　焼土混入＋黒褐色土
IV　真黒色土
V　焼　土

0　50cm

第６図　第１号住居址カマド実測図

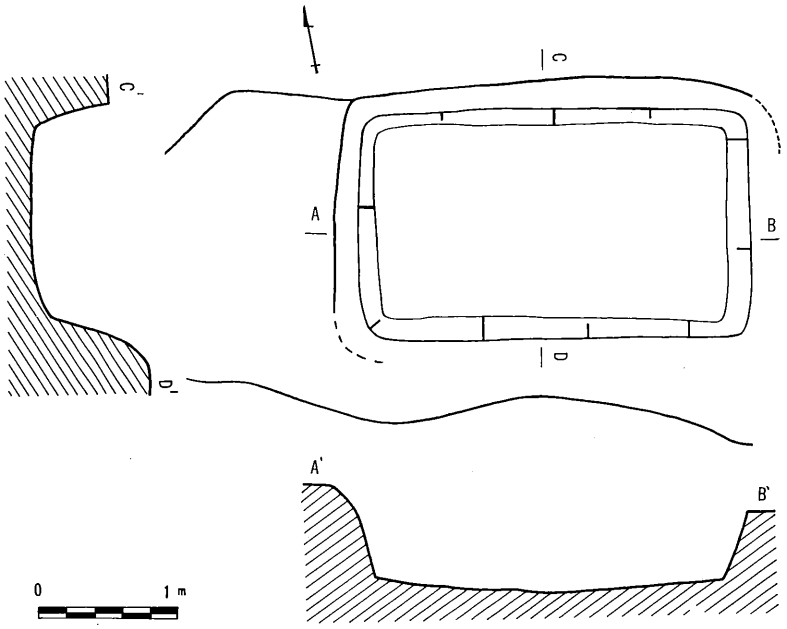
第４節　暗渠排水

第１号暗渠排水（第９図，図版４～５）

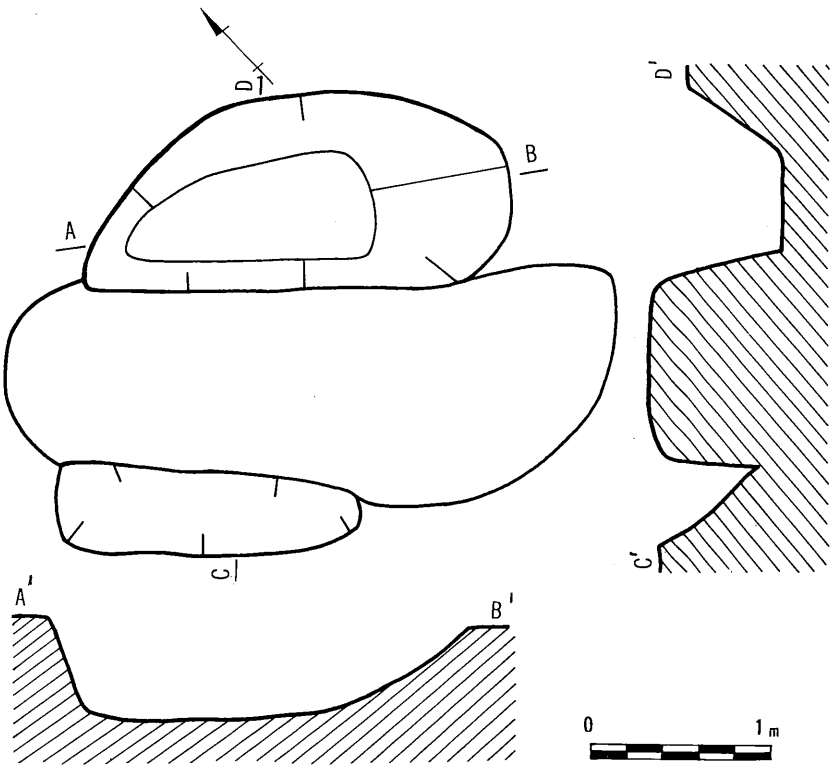
本暗渠排水は第Ⅰ区の北側に，発見された遺構で，表土面より40cm位下ったローム層面に人頭大からこぶし大程の大きさな石を不規則に無数配列してある。石の種類は安山岩，変成岩，花崗岩，粘板岩等さまざまであった。配列された規模は東西に約14m，南北に約１ｍ50cm～４ｍの範囲内であって，その石のレベルはわずかに高低はあるが，大般平坦であった。石はところどころで曲折しており，その附近では特に配列間隔が密であった。

石を取り除いてみると，下は川になっており，多量の砂が堆積していた。近くの古老に聞いてみるとこの暗渠排水は明治の終り頃につくられたそうである。

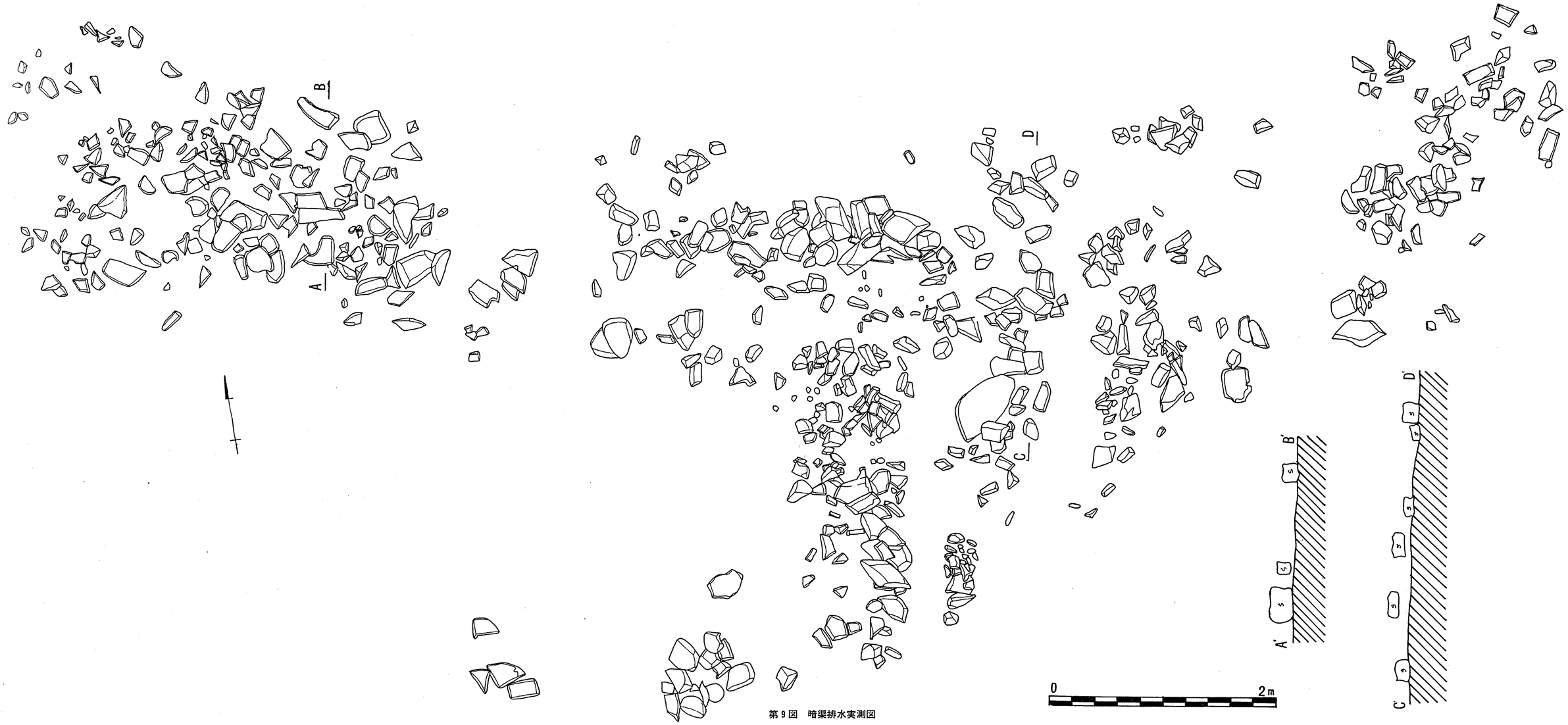
石の間からは石臼２個，その他多数の中・近世の陶器片，鉄器類が出土した。この遺物は暗渠排水を作る際，あるいは，あとからの流入の傾向が強いように思われる。　　（飯塚政美）



第7図　第2号墓壙実測図



第8図　第1号土塘実測図



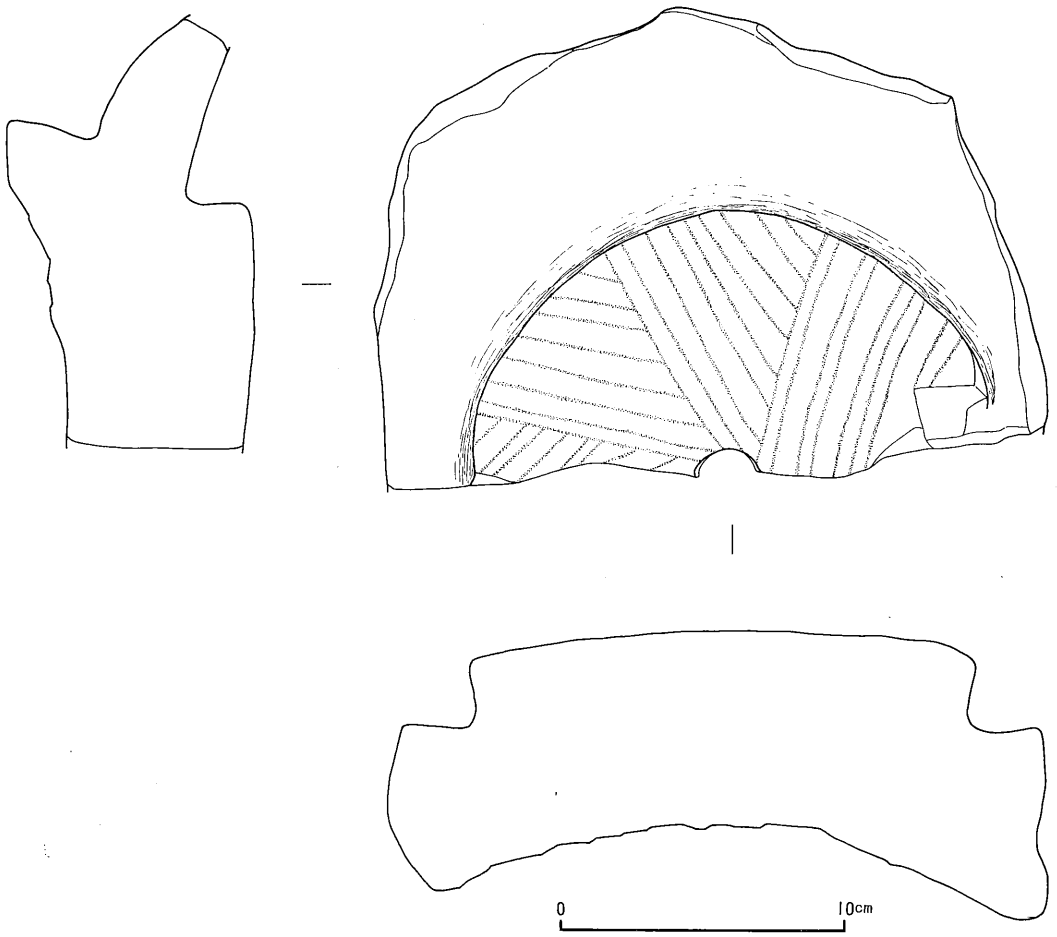
第 9 図　暗渠排水実測図

第Ⅳ章　遺　　物

遺物としては各種のものが出土したが，今回は割愛させていただいて後の機会に列記することにします。ここで主な遺物を記載してみると次のようなものがみられる。第１号住居址からは土師器須恵器，灰釉陶器片の出土，第１号墓壙からはキセル１，寛永通宝６枚，暗渠排水からは，内耳，天目，古瀬戸，中津川，黄瀬戸の中世陶器片と，近世陶器片，さらに鉄器類，石臼２個の出土をみた。第２号墓壙からは宋銭が１枚出土している。

第10図に記した茶臼は暗渠排水内より出土したものであって，半分は欠損しているが，見事な出来ばえをしたものである。石質は安山岩である。時代からして戦国時代あたりのものと考えられる。

（飯塚政美）



第10図　茶臼実測図

第Ⅴ章　ま　と　め

宮の原遺跡は、今回の調査では、時間的な問題、あるいは予算等、各種の問題が重なってしまって、結果的には遺跡全体からみればわずかな地域だけの調査しかできなかったことは、誠に残念であった。当初の開田の際に破壊されたとみえて、今回は平安時代の住居址１軒、中世時代の墓壙１基、近世時代の墓壙１基、時代不詳の土壙１基、暗渠排水１であったにすぎない。南側には小戸沢川が、北側には戸沢川が東西に流れ、それらにはさまれた台地上であるために、以前はかなりの集落が営まれていたと察知がつくところと思われる。平安時代の住居址は隅丸方形で、大きさ等の住居址に附随する諸条件は一般的にみられるのと大般類似していた。カマドは東壁中央部にあって石組粘土カマドであった。

第Ⅰ区の第２号墓壙は壁面及び床面に第２次的に粘土を貼りつけてあり、その構築状態は中世墓壙を研究するうえには好資料となろう。時代は宋銭の出土からして、一般的時代区分で考えられている中世時代であろう。また骨片出土より墓と推測するのが妥当な線と思われる。第Ⅲ区の第１号墓壙は寛永通宝の出土より江戸時代と決定づけられ、また、出土枚数より三途の川を渡る際に六文銭が必要であるという仏教思想が民衆のなかまで深く浸透していたということが裏付けできた。

暗渠排水は構築当時を知っている古老に聞けば明治時代の構築物であることを証明してくれた。むしろ、この遺構内より出土した中世から近世に至る陶磁器類、鉄器類、石臼等の遺物の方が歴史的価値を評価すべきものと思われる。なぜ、このようなものが出土したかはすぐに西側にある深妙寺との関係が重要視されてくる。伊那市寺院誌より当寺の由緒を簡潔に述べてみると次のようになる。『開基は常法院日遊上人と伝えられている。

日遊上人は宗祖日蓮聖人の六老僧の一人といわれた日朗上人の愛弟子であった。上人は宗祖日蓮の法華経帰依の精神を地方に流布伝道する為に、各地を巡って布教に勉めたが、偶々信州伊那の地に行脚説法の折、この寺に立ち寄った。その頃（鎌倉時代後期）この寺は西春近の山寺垣外にあり、真言密教を宗旨としていたが当時のことは詳かでない。

（山寺垣外はこの寺の所有地で約三町歩余もあり明治初年頃は山林であったが水田の痕跡もあり、老松もあり、塚もあった。現在は果樹園になっている。

日遊はこの寺に足を留めて、法華経の精神、即ち宗祖日蓮の教義を唱道し、日蓮宗を以って自ら開山となった。

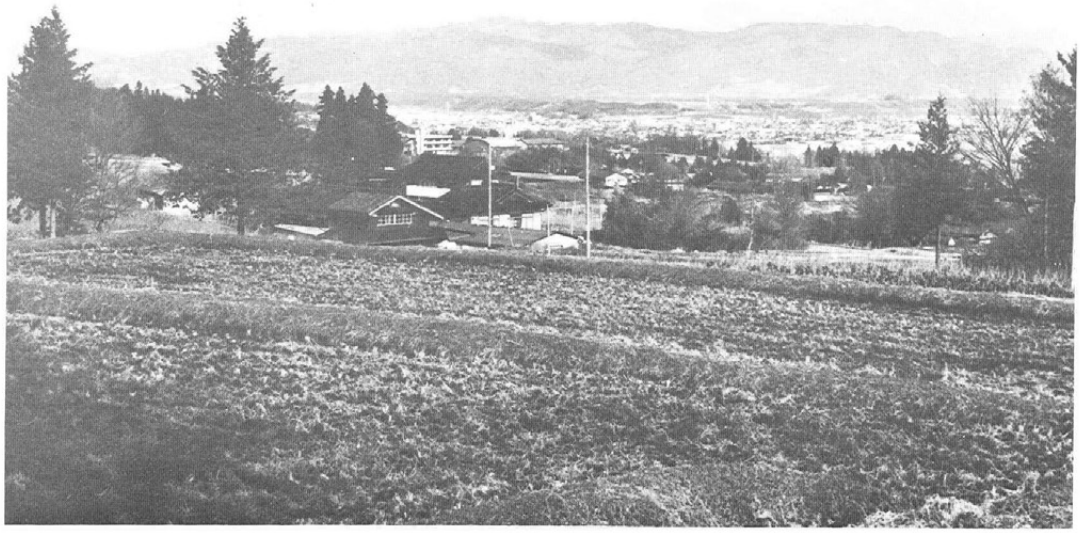
その後、慶年年間（1591－1614）に火災に遭い堂塔伽藍すべて鳥有に帰したため、現在の中村の地に移り再建した、しかし以後百五十余年を経て宝暦十三年（1763）また火災を起し堂塔を失ったが寺檀の苦心によって旧に復した。明治の初年ころ廃仏毀釈の影響と信徒自由の主張によって近くに新寺が建立され、檀徒、信徒に動揺がおこり分離が行なわれるに至った。

この寺には古くから各村々、部落毎に法華講が行なわれるに至った。

昭和31年（1956）２月９日又々火災に見舞われて茅葺の本堂、庫裡を全焼し七面堂も半焼した。しかしその翌年本堂は再建され、つづいて庫裡も建立され、七面堂は残った部分を生かして修理が行なわれた。かくて開山以来36世、６百有余年を経て現在は日典和尚の世代である。』

（飯塚政美）

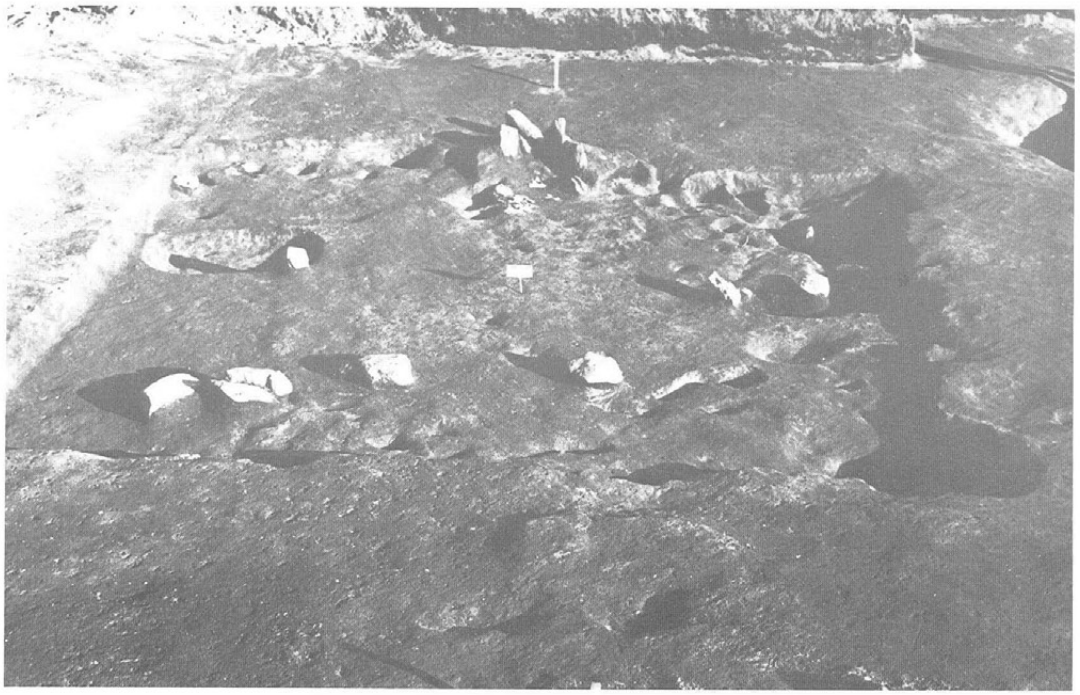
図　　版



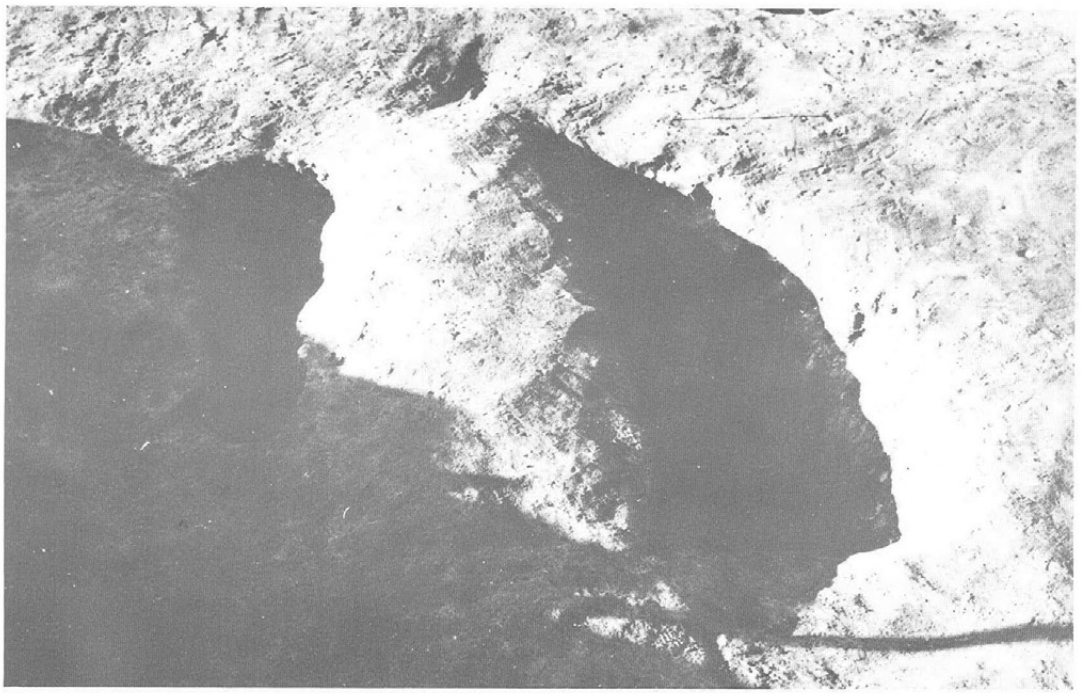
遺跡地を南西より眺む

遺跡地を西側より眺む

図版1　遺跡全景



第1号住居址



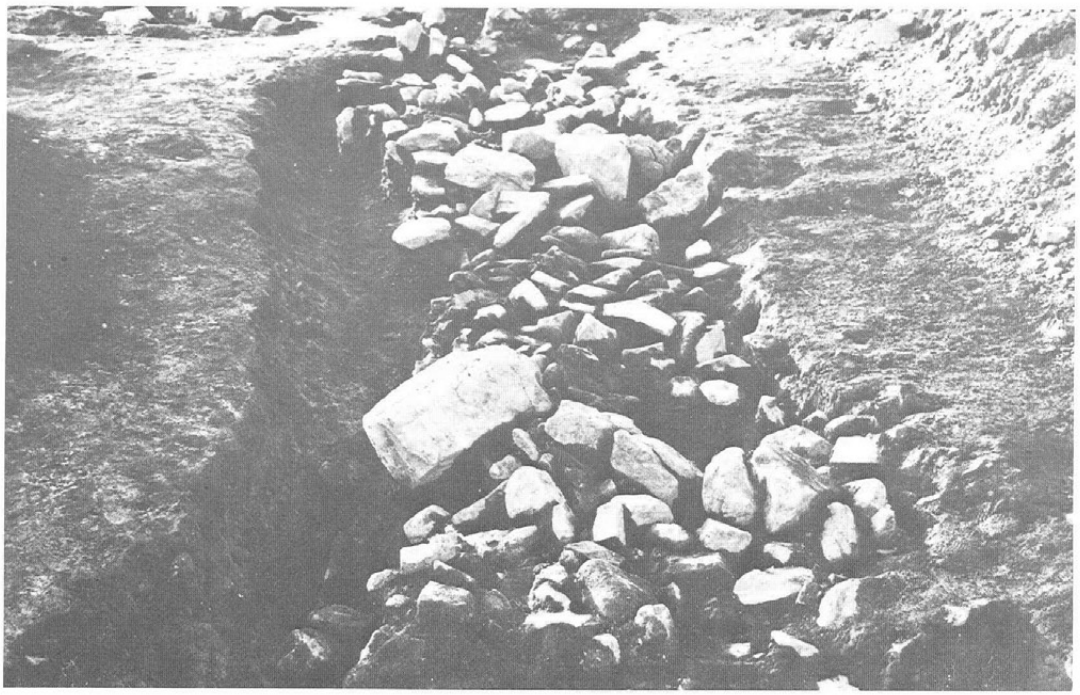
第1号土壙

図版2　遺　　構

第1号墓壙

第1号住居址カマド

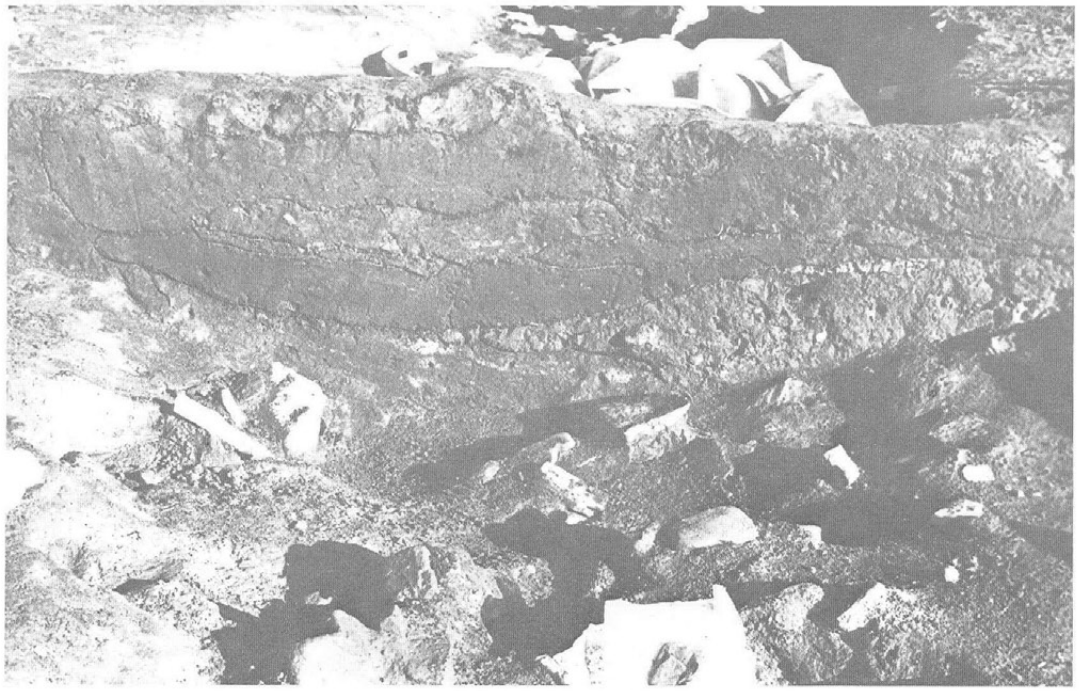
図版3　遺　　構



暗　渠　排　水

暗　渠　排　水

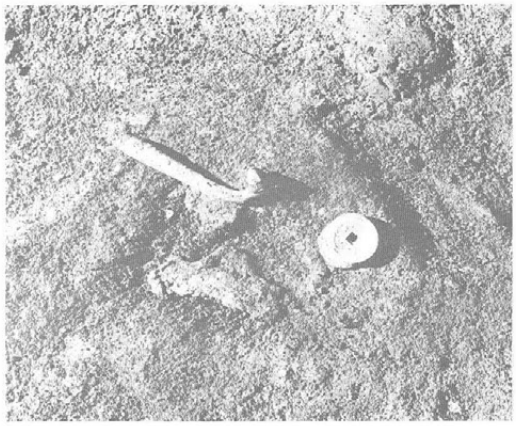
図版4　遺　　構



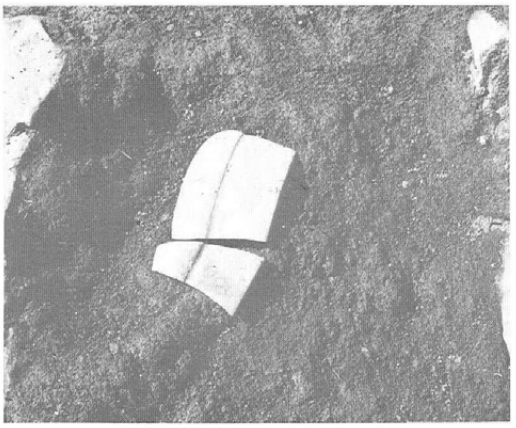
暗渠排水断面

第2号墓壙

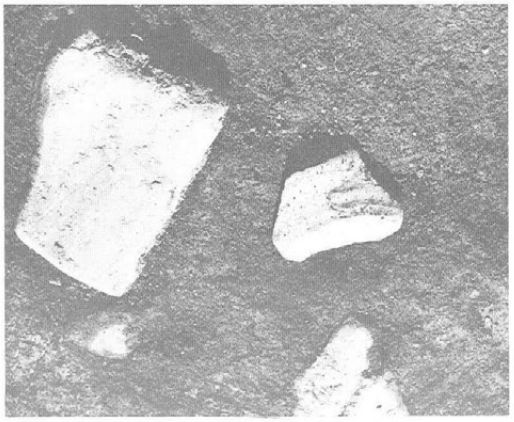
図版5　遺　　構



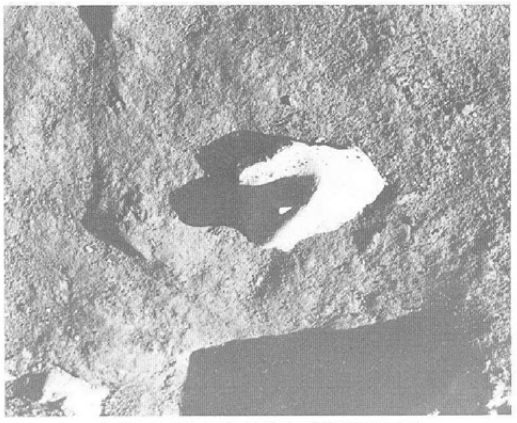
キセル・古銭出土状況（第１号墓壙）



陶器出土状況（暗渠排水）



陶器出土状況（暗渠排水）



内耳土器出土状況（暗渠排水）

石臼出土状況（暗渠排水）

鉄器出土状況（暗渠排水）

図版６　遺物出土状況

宮の原遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和53年3月15日　印刷
昭和53年3月20日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会
長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町
印刷所　㈱オノウエ印刷